

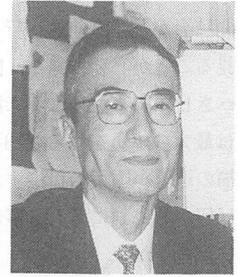
## ■ 特別評論 ■

## エネルギー・環境問題—人間の幸福から考える—

Energy, Environment and Pursuit of Happiness

新 宮 秀 夫\*

Hideo Shingu



## 1. エネルギー・環境問題の緊急性：なぜ幸福論を考えるのか。

紀元2000年が近づいてきた。このことで誰しも少し胸がドキドキするような気になりつつある。とり立てて今年1997年と2000年に何の差もない事は判っているはずだが、我々は時間の区切りを10進法でやっているので2000という“まるい”数字には、そこはかたない有難味を感じざるわけである。さて、時間をそのように区切って見ようとするならば、今は2000年なので、昔を振り返るなら紀元1000年、0年、BC1000年がどうであったかを考えるのが自然であろう。逆に未来を考える時には2の次は3なのだから、紀元3000年の世界を考えることが、2000年という年を特にとり沙汰することの必然的帰結となろう。つまり、我々はそのように物事を考えるチャンスにさし懸かっていることになる。

次の区切り、3、すなわち紀元3000年という時にはどんな社会が存在するだろうか？ 技術やサイエンスの進歩は今の我々の想像もつかない進歩がなされているであろう。これは紀元1000年頃の人が、自動車、飛行機、コンピューターを想像できなかったであろう事と同様である。しかし、1000年昔といえば平安時代で、源氏物語が書かれた頃だが、この物語に書かれている人間の感情は、微妙な心の動きに至るまで我々は今の世の中にそのまま移して実感できる。つまり、人間の心、考え方などは1000年位ではほとんど“進歩”していないことが判る。したがって我々が今残す“文化”を、我々とほとんど同じ感性を持つ3000年代の人々が、我々の想像もつかない機器類に囲まれてエンジョイすることになることは確かである。

そこで今、我々がどんな文化を残すかという事と、

もうひとつ、3000年という時代に果たして“文化”をエンジョイする子孫が存在できるかという事が問題となる。エネルギー・環境の問題は食料、人口問題と密接に関係しており、人類の存亡に係る緊急課題である。人類は解決されることの望ましい多くの課題を抱えているけれども、それらの問題には時間を掛けて取り組むことの出来るもの、つまり time is on our side と云えるものと、今解決しなければならない time is running out であるものがある。物事には手順というものがあり、これを間違えると何事も上手くゆかない。しかし手順の前後は大変起こり易い間違いで、その理由は困難な問題を避けて、やり易い事に先に手をつける習慣が人間にはあるためと見られよう。その意味でエネルギー・環境問題は、最も困難だが最も先に手を打たねばならない緊急性を有している。端的に言えば、先ず生き延びてこそ、良い事も悪い事も含めて文化を3000年に伝えることが出来るわけである。

それではどんな手を打つことが出来るかを考えねばならない。技術的な面から考えると、現在使われている化石エネルギー、原子力、太陽エネルギー（水力、植物を含む）の進歩改良を総合してもエネルギー・環境問題の抜本的解決には至らないように見える。その理由は技術改良の飛躍が難しい点に加えて、人間の社会活動を現在の先進国の状態を前提にして、その結果としてのエネルギー需要推定がなされる点にある。今“先進国”と呼ばれる国々は、19、20世紀の間ひたすら生活の利便性の向上、衣食住の“豊かさ、ゆとり”を求めて、工業技術の改善に専念してきた。しかしながら、今後世界のすべての国々が今の先進国並の“豊かな”社会となることはエネルギー・環境の面から見て全く不可能なことは明らかである。

この厳しい見通しに正面から目を向けようとするならば、ここで、そのようなエネルギー需給の予測を別の側面から考え直す可能性を探ることが、技術的に供給量の増加をカバーする努力と同じく重要となっていく

\*京都大学大学院エネルギー科学研究科  
エネルギー・社会環境科学教室教授  
〒606-01 京都市左京区吉田本町

る。そのためには先ず、21世紀および、それに続く人間社会が一体、何処へ行こうとしているのかを考えて見る必要がある。国の指針を記したものと見るべき日本国憲法には「幸福の追求に対する国民の権利は最大の尊重をする(13条)」と書かれている<sup>1,2)</sup>。幸福の追求が国民の目指すところであれば、その幸福とは何かを真剣に考える事は何よりも重要なことではないだろうか。

工学の立場から云うならば、工学の目的はより良い社会を作ることにある。我々エンジニアは、それぞれの分野で少しでも優れた技術を創出しようと日夜努力しているが、ちょっと振り返って見ると自分の身近にある技術的な目的に固執して、工学の目的である社会との係りは意識していないことに気付く。より良い社会とは何かを考えると、直ぐに誰でも気付くように、それは個人の幸福な世の中である。つまり幸福とは何だろうかと考えることが工学の根底にある問題なのだという事になる。工学の手法は、目的を正確に設定して有効にその目的を達成しようとするものである。したがって、今、これからの社会の目指すものが単なる生活手段の利便性、あるいはいわゆる豊かさ、を越えた人間の幸福にあるとすれば、幸福とは果たしていかなるものかを十分に検討する必要がある。

幸福になるのは我々個人ひとりひとりなのだから、本稿では先ず我々を取り巻く社会環境と自然環境とを理解して、それから我々の祖先つまり昔の人々が幸福について書いたものを調べて見る。その上で、一步でも、工学的な「幸福論」のまとめに近づき、今後そのような「幸福論」を踏まえた社会システムと、その社会におけるエネルギー利用・消費のあり方を検討してゆく出発点としたい。

## 2. 幸福について考える道筋：繰り返しによる物事の大きな変化。

最近とり挙げられる「複雑さ」や、かなり以前から広まった「カオス」、「フラクタル」などの問題の重要性が認識され始めた理由は、これらはすべて、「繰り返し物が物事の大きな変化、想像もつかない変革を生ずる」という原理を表わしているためである。この原理は「幸福」について考えるために我々を取りまく社会や自然について改めて見直したときに、実に至る所に現われることが判る。たとえば日本刀は繰り返し鍛錬により得られる多層組織によって優れた性質を生ずることは良く知られているが、その繰り返し数は高々

10~15回である。しかしその結果生ずる微細な層の数は数万層に及ぶ。つまり繰り返しによって生ずる層の数が、ネズミ算的に増えるという原理が使われているわけである。このように繰り返しの数が1, 2, 3, …と直線的に増加するのに対して結果が2, 4, 8, …と指数的、すなわち非線形に増加する事は、物事の想像もつかない大きな変化変革をもたらす。

想像もつかないという事は、我々の頭が物事の比較的短い時間内での観察、経験を基礎にした線形な予測をするように出来ているためである。幸福の追求においても直線的な思考では人間の心の中の微妙な幸福に関する感覚を満たすことにならないようである。以下に、我々を取り巻く社会、自然環境の中から、人間の幸福を考えるためにもっとも重要な要因である、経済(金)、哲学(心)、エネルギー、および生物としての人間を取り挙げて、これらに関してこのネズミ算の原理が如何に作用して重要な役割を果たしているかを考えて見る。その上に立って幸福について古来人々が書いてきた書物をレビューして、幸福がどのような性質のものであるのかを考えて見たい。

## 3. 経済：性善説か性悪説か。

このような、繰り返しの結果生ずる大きな変革が世の中の様々な事柄に現われる様子を先ず、経済について考えてみよう。それはとりも直さず、西鶴の日本永代蔵に書いてある事で、「世の中に、借り銀の利息程、恐ろしき物は無し」ということに尽きる<sup>3)</sup>。堺の水間寺で、1年に1倍というきまりで、1貫文を借りて帰った江戸の舟問屋が13年目に8192貫文にして返した話は、曾呂利新左衛門が、何かのご褒美に畳一枚に一粒の米を、次の畳に2粒、その次に4粒・・・と倍々して32畳敷の分の米を下さいといって秀吉を参らせた話などと同様、経済の根本に倍々ゲームの原理があることを見抜いている<sup>4)</sup>。現今の経済活動を見ても、成長率5%になれば経済が健全になったなどと云われるけれども、5%でも1%でも先の水間寺のような100%でも、複利法で行く限り倍々ゲームの要素は厳然として作用するわけで、その原理はいわゆるネズミ算と同じものである。限界を超えてこのゲームを続けることが不可能なことは、法律でネズミ講が禁止されている事を見れば自明のことだ。

どうして経済がこのようにネズミ算になるのかは、それが人間の性質に組み込まれているためであろうと推測せざるを得ない。ウェーバー・フェヒナーの法則

という、実験結果から示された人間の性質がある<sup>5)</sup>。それによると、たとえば光の明るさなどの、刺激の増減を人間が識別出来る最小変化量は一定ではなく、その時受けている刺激の強さの何パーセントという、その率が一定であるらしい。この刺激をお金におき替えると、人間は常に一定量の収入の増加では喜ばず、その時の収入の何割かの増加を欲することになる。つまり増えれば増える程もっと（その富に応じた割合で）欲しくなることになって、複利法的経済の膨張の基礎を作ることになる。

そんな無限の膨張が破綻を内包している事を人々は古くから感じていて、例えばおよそ2500年も昔の人であるソクラテスは市場の品物の多さに驚いて、「私にいらぬ物がこんなにあるのか!」と云っている<sup>6)</sup>、徒然草（217段）にも<sup>7)</sup>、人間の欲には限界が無い（所願無量）一方、世界の物には限りがあるのは困った事だと書かれている。

ところが、だからと云って人間の止むに止まれぬ欲求を制限することは社会の活力を低下させる。つまり個人の能力が（欲望という駆動力によって）十分発揮されないと社会の富はたちまち損なわれてしまう。人間は己の欲望に沿って行動する時に最大の力を発揮するものであって、その発揮される力が自然に社会の為になる方向に向くようマネージすることが必要なわけである。これはアダム・スミスの理論だが、過去200年以上もこの考えが有効なことが実証されてきた。実証されてきた理由は20世紀の間は地球の容量にまだ余裕があり、経済が膨張を続けることが可能だったからである。どんどん膨張することが可能であれば経済のコントロールは容易だが、膨張の限界に至ると問題は難しくなる。アメリカの西部開拓に見ても、西海岸に至るまでどんどん新天地がある間は争いが少なかったはずである。宇宙も今膨張を続けている事の結果として、我々がひと時安らかに暮らせているのだそうである。こちらの方はあと数百億年膨張を続けることが可能なので<sup>8)</sup>、とりあえずの問題とはならない。

しかし我々の地球上の経済活動はそうは行かず、今後、21世紀の社会には何か全く新しい経済のパラダイムが現われる事が必要だ。その社会では人間が活力を失わず、しかも倍々ゲームの経済膨張もない方策がとられねばならない。方策と云っても沢山の規則や法律を作っても無駄で、スミスが示した自由放任による活力の増進や、ケインズが示した利率低下による再投資とその結果により生まれる職の増加と賃金上昇による

富の再配分、などのように、たった1つの基本的施策によりあまり手を加えずに、先述のように人間の活力が自然に社会のために向く事を考える必要がある。つまりスミスやケインズの立場である人間の本性は自分本位のものであること<sup>9) 10)</sup>、云うならば性悪説を前提に、その性悪の活力を自然に利用することが考えられねばならない。

もちろん、スミスもケインズもそして性悪説そのものを説いた荀子<sup>11) 12)</sup>も人間の本性が己の欲に基づく行動に流れ易いので困ったものだ、とだけ云っているのではない、むしろ個人としては、環境や教育によって無制限な欲望を抑えることは可能であり、性善の方に導き得る、と述べているわけで、人間の本性が善である面も十二分に理解していると考えられる。けれども、社会の経済活動を動かして行くのはやはり、人間の性善的な側面ではなく、性悪的な側面にならざるを得ないことを指摘しているのである。

性悪の側面によって経済が動くときには必然的に倍増の原理が働くようになる。この考え方に沿って経済のネズミ算的膨張の制御を考えるひとつの方向として税制の徹底的研究が必要な気がする。これはケインズも述べていることだが、税金による金銭の倍々ゲームのstakesを低くすることにより、より多くの人々が金銭ゲームに参加して成功するチャンスを与えることが可能となるためである。いずれにせよ、幸福の一大要素である社会の安定と、個人の経済的成功の可能性を確保するためには経済の根本法則である倍々ゲームの恐ろしさをはっきりと認識して、それを如何なる手段でマネージするかに全力が注がれるべきで、目先の経済の浮き沈みに心を奪われる事は何よりもまずい事なのである。

#### 4. 哲学：運命論か自由意思か。

さて、次に心の問題つまり哲学について、倍々ゲームの原理を見てもよう。哲学というと、東洋、インド、西洋で、孔子、釈迦、ソクラテス等がほぼ同時期に人間の人間としての道のようなものを考えるに至ったのだが、その前も後ろも含めて哲学者が何を考え悩んだか、その根幹をたったひとつだけを取り上げると、それは、運命は決まったものかそうでないか、という事のようにである。運命論とか決定論という立場は、世の中のすべての出来事は末の末までもう決まっただけで、人間がどのようにあがいても変更は不可能である、とするものである。その逆の立場は、もちろん人間の意

思によって未来は開拓も出来、またダメにもなり得る、つまり人間の自由意思は何物にも束縛されないものだという事である。

この2つの考えは、どちらも人間が生きて行く上で具合の悪い要素を含んでいるとすぐに判る。前者でゆくと、人間が善行を積もうが非行に走ろうが、そんな事は前から決まっている事でどうしようも無いし、未来の事柄を変える事にもならない。後者でゆくと、世の中の事は何事であれ原因と結果というものがあるのに、その因果関係はどこで途切れる事になるのか、原因も無いのに結果がポコッと生ずる事を認め始めたら何を信じて良いのやら大変困ってしまう。

18世紀にニュートンとライブニッツが微分方程式を考案して、天体の運行も大砲の弾道も計算で正確に予測出来る事が発見されると、決定論は勢いを得て、予定調和説などという神の決めた未来に向かって人間、社会が進むという考えまで出た<sup>19)</sup>。ところが、1960年代にカオスの理論が現われて、微分方程式といえども必ずしも決定論的に答えを出すものでは無いらしいということが唱えられ始めた。特に非線形といわれる数式では答えがカオス、すなわち混沌となって予測不可能となる場合が多い事が明らかとなった。その最も簡単な例として倍々ゲームの場合がとり上げられている。つまり繰り返しの数が1, 2, 3, …と増えたとき、答えが2倍, 4倍, 8倍と増える事は、非線形現象そのものであり、カオスを生む性質を内包しているというわけである。これは、何事であれ始め(初期値)のほんの小さな変化が、繰り返しのたびに2倍, 4倍, 8倍, …と増大すると、先述の利息の場合同様、直ぐに収拾がつかなくなる事を云っている。

このようないわゆる初期値敏感性と呼ばれる事象は、人間が古くから感じてきたことで、ほんの小さな出来事が人間の運命を大きく変える事は多くの小説の題材にされてきている。世の中の多くの事象は、繰り返しのより起こる(例えば1日1日の繰り返し、毎年、毎年の繰り返しなど)ので、繰り返しによる事象の変化の法則に倍々ゲームの要素があるとき(例えば経済の場合のように)今いる状態からは将来の予測が本質的に不可能ですよ、という事がカオスの理論によって云い出され始めているわけである。どちらが正しいのか、今、決着がついているわけでは無いけれども、世の中の事柄の因果関係が成立する範囲、などという事も時間の流れすなわち、繰り返しの回数の中で、捕えられべきであることは間違い無い。

## 5. とり返しのつかない変化：エントロピー増大は状態の非線形的増加による。

カオスの発生による未来情報の消失は、エネルギー学(熱力学)の本質とも直接関係している。例えばN個の分子を含む気体が、温度を一定にして2倍の体積に膨張した時に生ずる分子配位数の増加は2のN乗すなわち倍増計算そのもので表わすことが出来る。これはエントロピー変化という量で定量的に示すことが出来るが、エントロピーが増えるという事は、一旦起こった変化は元に戻れないという事だと教科書に書かれている。つまり我々の社会が、どんどんと資源も環境も使い果たし不可逆的に一方向に進んでゆくのは、この倍増の原理のためだということになる。何百億年も先には全宇宙の温度が等しくなって、もうそれ以上何の変化も起こらない状態となる、いわゆる、“熱的死”に至るかも知れないのはこの原理による。

しかし、そこまで考えるのではなくて、人間の幸福を考えるための数千年という時間の中においても、人間の生存が不可能となる程度の不可逆的变化、すなわち、とり返しのつかない破局的環境変化も案外あっさり起こるかも知れない。破局に至る時間を伸ばす方策は、ひとつには、今地球上にあるエネルギー資源をケチケチと使うことだけれども、前述の所願無量、あるいはウエーバー・フェヒナーの法則によって人間が性悪の本性から行動する性質であれば、それに期待する事は難しい。となると、地球外の、長続きのする(何億年も?)資源である太陽に頼る外は無く、その利用技術の開発に(まだ少しでも地球上の資源に余裕のあるうちに)全面的投資をすべきであり、同時にそれ程エネルギーを使わずとも幸せにされる社会を考えてゆくことも必要である。もちろんそれ等の方策、具体的実行は人間の良心に待つのではなく、個人の止むに止まれぬ欲望を逆に利用するやり方であればならない。性悪説をとる立場から端的に云うならば、太陽エネルギー利用が“儲かる”ように、例えば税制によって、社会がガイドされねばならない。

## 6. 生物としての人間：誰が誰の先祖か。

次に倍増計算の現われる身近な事柄として、進化論、すなわち生物としての人間について考えて見る。ダーウィンは1859年に出版した「種の起源」で、人間を含むすべての動物、植物は始めはほんのわずか、あるいは1個のものから発生したと結論しており<sup>10)</sup>、今

もこれは正しいとされている。ところで現在の地球上の生物に至るまでに、それらの生物の基本である細胞は何度の分裂を繰り返したのだろうか。生物の歴史は35億年と云われる。細胞分裂はまさに1個が2個に、2個から4個になる現象で、倍々計算そのものである。35億年の倍増ゲームを考えると、とんでもない創造物である人間がたった1個の原始生命から進化して生じたことも納得できるような気がしてくる。

ここで驚くべき事は、ネズミ算、すなわち倍々ゲームの原理が、物事の混沌、情報の消失を生ずるばかりでなく、たった1個の原始生命から、人間を含む驚くべき生物系、驚くべき秩序を持った複雑きわまりない構造をも創り出したことである。このように同じ原理が一方ではカオスを生じ、他方で秩序を生むという事は不可逆過程の熱力学の専門家のプリゴジンが指摘しているところである<sup>15)</sup>。

そのように大きな変化の生まれる何億年という繰り返しを考えなくとも、我々のもっと身近な祖先の事を考えて見ると、両親が2人、祖父母が4人、曾祖父母が8人、…と数えて見ると1000年昔、およそ40代前の祖先の数は誰しも例外なく確実に2の40乗すなわち1兆人近くいる事になる。もちろん1000年昔、源氏物語が書かれた頃の日本の人口は高々数百万人のオーダーであろうから、1兆人の祖先の数え方は、何重にも重ね合わされてこの数百万人に押し込められていることになる。云い換えれば我々は皆、たった1000年遡るだけで、誰が誰の祖先なのか百万分の一(ppm)のオーダーでしか識別できないことになっている。もちろんこれを更に1000年遡ると、つまり2000年昔の事を考えると、1兆×1兆すなわち10の24乗人の祖先があることになり、いよいよ誰が誰の祖先なのか問題にもならない事になる。

更によく考えて見ると、これは祖先のことだけでなく、子孫にも当てはまることに気付かねばならないだろう。1000年後の子孫は私の子供もあなたの子供も区別出来ませんという事である。人間が、憎しみ合ったり愛し合ったりするのは、それこそ人生のドラマで、人生の目的ではあるけれども、あまり目先の事に執着する事、すなわち線形的視野で未来を予測しないようにする事も幸せの大きなファクターである事が、このネズミ算の考察から明らかではなからうか。

## 7. 人々が書いてきた幸福論：満足は幸せでは無い。

さて、以上で人間をとりまく環境、あるいは人間についての客観的考察は終わりにして、幸福について書かれたものを見てみよう。アリストテレス(紀元前450年程)の幸福な生活について書かれたものから、セネカ(西暦0年頃)の幸福論や、ポエチウス(500年頃)の「哲学の慰め」からズーと下って19世紀から20世紀のヒルティやアランの幸福論が有名だが、もちろん棚に入り切らない多数の本が書かれている。総じて何が書かれているかといえば、心の平静が如何にすれば得られるかを述べていて、自分は幸せな生活、生涯を送ってきたので、お教えしましょう、と云った説教がましいものが多い。その他、「だまされて失った金ほど有効に使った金はない」などという役に立つ生活の智恵は随所にちりばめられていて、面白くてためになる本も多く総じて、満足すなわち幸福、豊かさすなわち幸せという前提で書かれている。

ところで、これらの本のいくつかに気になる文句がある。それは例えば「幸福になった後はどうする?」といった表現である。これで思い当たる事は、前述の通り、我々は、物事の時間的发展の中で暮らしているので、幸福は達成されてハイ終わり、というものでは無い事である。今の幸福が過去の何事かの結果であれば、今の幸福は次の幸福あるいは不幸せの原因となっているはずである。となると幸福という状態も時の流れの中で起こる倍々ゲームの一点にしかすぎないわけである。つまり達成された幸福をエンジョイする事は無理だということになる。おとぎ話しの中に出てくる王子様とお姫様はいつでも艱難辛苦を乗り越えて結ばれると、その後は一生幸せに暮らしましたとさ。となるけれども、果たして幸せなのは満ち足りた生活の方か、苦難にあえいでいた時なのかは、満足な状態で何をするか想像してみると怪しくなる。このことは、デニス・ガボールの著書「熟成社会」に書かれている通り<sup>16)</sup>、飢えや貧困という克服すべき明確な目的を失ったときに人間が同時に幸福感を失う恐れのある事を端的に示している。

大体のところ、魅力あると感じられる人、すばらしい人物だと思える人は、成功、満足、余裕、安心、といった事にひたっている人では無い。そうでは無く何かをしようとして、あるいは、せねばならない状況に立たされて、不安、恐れ、心配を抱えている人に、人間としての魅力があることに気が付く。人間はやはりウェーバー・フェヒナーの法則に沿って、倍々ゲームで次々展開してゆかねばならない時に、幸せを感じる

題	著者名	出版年 翻訳版元	コメント
私の幸福論	福田恆存	1979	「幸福への手帳」の改著。女性を対象に書いた心構えの書？美人は得をする。一人でもいい、他人を幸福にしない人間が、自分を幸福にしうるか？
生きるための幸福論	加賀正彦	1980 講談社 現代新書	悪人なら殺しても良いか、本当の幸福。自分のような者でも不幸な人の役に立つ。
体当り幸福論	鈴木健二	1984 講談社	人間はいつもさようならばかり言って生きてる。印象深い日や、人にたくさんめぐり会えた人は幸福な人生を送るだろう。
幸福	向田邦子	1985 新潮文庫	素子と数夫、不幸の中に転がっている幸福を拾いあげる。
「気」の幸福論	河野十全	1986 真理生活 研究所人間社	宇宙の力を吸収しておのれの力とする。意志の力で欲望から抜け出す。
ネイチャー感覚 (20世紀最後の幸福論)	浜野安宏	1989 東急エジュ ンシー	夕日を見て泣ける子供はすばらしい。自然保護は日本人の義務、私が夏住んでるワイオミング州ジャクソンはネイチャー感覚派の村だ。
幸福論	下田弘	1991 青工社	一高教授、明治40年生まれ 祟り、家相、(偶然ではない)。1. 何も考えない人 2. ひとつのことにこだわる人 3. 色々考える人。3だけが幸福の適格者。不幸論としたかった。
新幸福論	波頭亮	1991 (株) メディアファ クトリー	国富から個福へ、幸福になるために自分の主人たれ、自分の幸福、豊かさを選びとれ。
人生のヒント・仕事 の知恵	竹内均	1991 三笠書房	ヒルティの幸福論から私が学んだこと、「つまらない人生」を自分で選びとらない方法。よいこと、「勤勉、正直、感謝」をした者には良い結果が得られる。
新しい時代の幸福 論	藤川吉美 周曉燕	1992 慶応通信	女性の幸福論、幸福の基礎的条件は自尊心の充足。グループ、社会の不幸は「囚人のジレンマ」に原因がある 事が多い。社会システムはその解放のためにある。
幸福論	柴門ふみ	1992 PHP 出版	いつでも幸福というわけにはいかない、幸福は巡って来て、巡ってゆくものだ。はた目にはスイスイの人にもそれなりの悩みがあるものだ。(ポエチウスと同じ事いってる)
幸福論	新井満	1992 PHP研究所	辛くて苦しいあとの幸福感。苦あれば楽あり。至福の一瞬。表面的な幸福と真の幸福。自分はいま大いに幸福である。
7秒の幸福論	秋元康	1992 青春出版 社	幸せは自己満足の連続。自分の満足感が幸福。恋と愛についての教えを書いている。38歳にしてはちょっと説教的か？
共福の思想	金泰昌 Kim Tao- Chang	1992 GEC 出版	勝った負けたの世界を過去のものとして、共に生きることが生物としての人間の本来の姿ではないか。新アリとギリギリスの話。どちらもがいるから社会が成立する。すなわち共福の社会を目指すことが大切。
昔がヨカッタハズ ガナイ(こんな時代 だからこそ新・ 幸福論)	山中恒	1993 K.K. ベ ストセラー ズ	仕事(会社)に忠勤を励むより家庭サービスを！自分のための幸福を考えるとときです。
男のための幸福論	諸井薫	1993 講談社	きれいな事と安手の正義感で世間の出来事を裁くマスコミに対する慢性的不満。
幸福のかたち	山陽新聞社	1995	どうにもならない状況でも、どうにかしなければならなかった人々、ならない人々の生き方に幸福のかたちをみる。
科学と幸福	佐藤文隆	1995 岩波書店	ニュートン・ダーウィンによって人間は、自分達が絶対的なものだという見方を失って、広大な時間と空間の中に放り出されてしまった。哀れだけど、これが自由なのか？ パートランド・ラッセルのいう幸福な科学者か？
世紀末の幸福論	小原信	1995 PHP 研究所	仕事算のあやまり、むなしくない人生ゆるがない信仰。してもらう幸せとしてあげる幸せ。